
モノクローム

八音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクローム

【Nコード】

N5573M

【作者名】

八音

【あらすじ】

ボクの家には3つ上の琴美と言う女の子が住み着いている。

喜怒哀楽のないボクとは対象的な活発な彼女。

上京した頃の頃に知り合いずっとボクの事を気にかけてくれていてボクの事を好きと言ってくれているのだがボクには人とは付き合えない理由があった。

モノクローム

ボクには喜怒哀楽が無い。

幼少時代には存在した。

そしていつ頃から無くなったのかも。

正確には無くなった訳ではなく表に出さない事があたり前になったと言うのが正しい表現だ。

ボクは人と深く付き合った事が無い。

深く付き合って最後に言われる言葉をボクは知っているからだ。

『あなたは何を考えてるのか分からない』

『ちょっと洋平！！今日こそはどっか出かけるんだからね！！』

パソコンに向かいコーヒを飲んでるボクに問いかける

『どっか行きたいなら一人で出かけてきなよ』

『一人で出かけたって面白くないでしょ!!』

ベットの上でダダをこねる様に騒いでる彼女の名は琴美。

彼女は以前ボクが働いていたBARと一緒に働いていた3つ上の先輩だ。

上京したばかりのボクはまずご飯に困らない仕事と考えて飲食店を選んだ。

そこで知り合った彼女はやけにボクを気にかけてくれたのは嬉しいのだが、

飲食店の活発的な雰囲気はボクには合わずに1年もせずに辞めた。

『別にオレと出かけたって楽しくねえだろ?』

『んな訳ないでしょ!!楽しいから一緒に居るんだもん』

前から琴美はボクと一緒に居る事を楽しいと言ってくれるのだがはつきり言ってボクには理解出来なかった。

会話のネタが豊富な方でもなければ

ボクから話しの話題を振る事なんて殆どない。

ずっとパソコンに向かっているボクに一歩的に琴美が話しかけて来てボクは相づちを打っては琴美が騒ぐ

それでも琴美は絶対に

『何を考えてるのか分からない』

と言うセリフを言う事はなかった。

そのセリフを言われただけでもボクにとっては居心地がよかった

『わかった！！じゃあ1時間だけ出かけよう』

『、、、何がわかったんだよ？』

『どうせ人混みがキライだから出かけたくないんでしょ？
だから今日は近くの公園に散歩しに行こう』

『、、、、』

人混みがキライだから出かけたくないのは凶星だ

『さあ！早く着替えて着替えて』

『公園を散歩してなんか楽しいの？』

『手繋いでお散歩だなんて凄く楽しいじゃない！！
そんなくらいなら付き合ってくれてもいいでしょ！？』

『え、ええ、まあ、、そんなくらいなら』

そう言っつていつも1時間で帰って来れない事をボクは知っている

過去を知りたがる

『ただいまあゝ！！』

いやあゝ楽しかったねゝ、ボート！！』

『そうだね、ゝ、ゝ』

結局今日は水池のある公園まで出向きボートを漕がされるはめとなった。

『また行きたいね』

『そ、そうだね』

『いつも家でパソコンばっか弄ったら体なまっちゃうよ！！たまには体使わないと』

『へえ、へえ、ゝ、ゝ』

『またそのやる気のない返事して！』

『別にやる気ないわけじゃゝ、ゝ、ゝ』

『なんて言つか洋平には覇気がないのよね！！覇気が！！』

『別に覇気出そうとなんてしてねえし』

『男の子なんだからシャキってしなさいよ！シャキっと』

『今日はボートまで付き合っただからいいでしょ』

『そうね。凄く楽しかった！ありがとう』

『楽しかったんならよかったよ。さてご飯にでもしますか
今日は何食おうか？』

家に着き荷物を片付けベランダで一服してボクは聞く？

『そうねえ〜ほんじゃあ今日はパスタにしようか』

『あいあいさあ〜』

そう言いボクは鍋に火を付けお湯を沸かし始める

BARで働いていた時にキッチンだったボクはある程度の料理を教
わった。

昔から絵を描いたり工作したり何かを作ると言う事は好きだったの
で料理は結構好きだった

一人で集中出来る事は基本的に好きな性格なんだろう

そんな感じでいつもご飯の支度はボクが担当していた

『ねえ〜洋平？』

部屋とテーブルの片付けを終えた琴美は
ベットでくつろぎ雑誌を読みながらボクに問いかけた

『ん？』

『洋平って出身こっちじゃないよね？』

『、、、、そうだね』

『なのにあまり方言でないよね？』

『そりゃこっちに来てだいぶ経つし』

『こっちに來たての時からあまり出てなかったよ』

『そう？じゃあ順応性が高いんだね』

またこの会話か。そう思いながら答えた

『どこ出身なの？』

『別にどこでもいいでしょ』

『そうやっていつも洋平は自分の事話さないよね』

『別に過去の事なんて知ってたって知らなかったってどっちでもいいだろ』

『なんでそんなに自分の事話したがないの？』

『別に話したくない訳じゃないけど』

『じゃあ話してくれたっていいじゃん！！』

それともあれ？過去の事知ったら私が洋平の事キライになるとでも

思ってるの?』

『別に嫌われたくないからとかじゃないよ』

『じゃあなんでよ?』

『なんでもいいだろ』

『聞かれたらまずい事でもあるの?』

『別にないけど』

『じゃあ話してくれたっていいじゃん!!』

私洋平の出身地どころかなんで上京して来たのかとか家族構成とかなんも知らないんだよ』

『よしわかった。じゃあその質問すると琴美をキライになる』

『ああゝ!!またそれだゝ!!』

ピ。ピ。ピ。ピ。!。ピ。ピ。ピ。ピ。!

ちょうど良くパスタの湯で上がりのタイマーが鳴り
ボクはパスタをフライパンに移しながら言う

『はい、またそれですよ。』

もうご飯出来るからテーブル準備して』

『いつもそうやって話を誤魔化すゝ!!』

ベットでジタバタしながら渋々テーブルにアイステイーを準備する
琴美

『はいはい、また誤魔化しますよ』

ニンニクの香りが漂うフライパンにパスタをサッと絡めて
手際良くお皿に移しテーブルに運んだ

『はいはいご飯はおいしく食べないとバチ当たるから
さっきまでの話題は終了お』

『はぁ〜い』

ふて腐れた顔で渋々頷いた

『先食べてていいよ。俺一服してから食べるから』
そう言い喫煙場のベランダへと出て行った

ボクは必ずご飯の前に一服するのが習慣となっている
ベランダから部屋に入るとおいしそうにパスタを食べている琴美が
いた

『おいしい？』

『うん！洋平の作るペペロンチーノ大好き』

『それはよかった』

早くボク以外でおいしいご飯作ってくれる人見つけてね
そう心でつぶやきボクもパスタを口に運んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5573m/>

モノクローム

2010年10月17日02時34分発行